

2020年6月NHK中部地方放送番組審議会

6月のNHK中部地方放送番組審議会は、18日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、6月7日(日)に放送した「これでわかった！世界のいま」の内容について報告があった。

続いて、放送番組について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	稲村 修	(魚津水族館館長)
副委員長	松田 裕子	(三重大学副学長)
委員	井口 昭久	(愛知淑徳大学健康医療科学部教授)
	岡安 大助	(中日新聞社取締役)
	榊原 陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
	坂田 守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
	玉井 博祐	(能楽師／玉井屋本舗社長)
	都築 紀理	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	徳田八十吉	(徳田八十吉陶房代表)
	成島 洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	安井 香一	(東邦ガス(株)代表取締役会長)

(主な発言)

<放送番組一般について>

- 5月8日(金)の静岡スペシャル ショートストーリーズ「Shall we スマイル?～モデルスクールの日々～」を見た。冒頭でハイヒールを履いて歩く女性の映像があり、「#KuToo」の運動に対する反響が広がるなか、ハイヒールを女性の美しさと単純に結び付けるような表現にやや驚きながら見始めた。しかし、内容としては一人一人の生徒が、なぜスクールに通っているのか、講師が何を思って生徒に向き合っているのかに焦点が当てられておりとてもよかった。
- 5月27日(水)の歴史秘話ヒストリア「富山の薬売り 知恵とまごころの商売道」を見た。顧客の家に薬を置かせてもらい、使った分だけ代金を受け取る「先用後利」の話は知っていたが、実は、薩摩藩からの依頼で昆布の密輸やスパイもしており、討

幕維新の原動力にもなったという話は初耳だったので、おもしろかった。役者が使う方言にはたいい違和感があるものだが、今回は富山ことばを非常に上手に使っていたので驚いた。6月5日(金)の越中とやまスペシャル「富山の薬売り 300年の秘話」でも同じような内容を伝えていたが、番組の最後で「今の国際社会に必要な信用、信頼を典型的に示しているのが越中富山の薬売りさんのビジネスです」という専門家の話が紹介されていた。信用や信頼が国内外で失われている今、非常に重い言葉だったと思うし、とてもよい言葉で番組を締めくくっていた。

- 5月29日(金)のナビゲーション「在宅で見直す親子のSNS利用」を見た。新しい生活様式の中でのコミュニケーションをどうしていくのかという新しい視点の番組だったが、視聴者がSNSについてどれほど理解しているのかが気になった。まずはSNSについて説明し、次にどのようなリスクが潜んでいるのかを解き明かし、そのうえで子どもへの対応のしかたを解説したほうがよかったのではないかな。ホームページには最新のリスクを紹介すると書いてあったが、特に新しさは感じられなかった。SNSを人とつながる安心感を与えるものとして非常に好意的に描いていたが、不特定多数の人とつながる安心感などは持つ必要はなく、特定多数で十分ではないかと思う。また、SNSは一度投稿したら一生残ってしまう危険性があることを、もっと強調してもよかった。写真を投稿してよいかどうかを被写体である子どもに確認したほうがよいと言っていたが、小学生が判断できるとは思えず、あまりよい方法とは思えなかった。一方で、事例を紹介し、望ましい対処方法や改善策を提案するという内容は非常に分かりやすかった。親の不注意な投稿が子どもを危険にさらす可能性があるという指摘にも納得することができた。スマートフォンを子どもに持たせる際に24か条の誓約書を書かせたという事例が紹介されていたが、そこに書かれていた内容がすばらしかった。1か条ずつ取り上げるだけでも番組になると思った。全体として、親子でしっかり話し合い、自分のことは自分で守るという意識が重要であることを啓もうしてくれる、よい番組だった。

- 5月30日(土)の有吉のお金発見 突撃！カネオくん「最新技術で劇的進化！首都高の最新お金事情」を見た。ほんわかした雰囲気好きな番組だ。今回はリモート収録で、出演者は青いマントを着て撮影しているという舞台裏を紹介していたが、合成画面はまずまずの出来栄えだった。テーマは首都高速道路のメンテナンス革命で、「インフラドクター」という大変優れたシステムを紹介していた。年間4万か所の損傷を発見しているということには驚いたが、過度に不安をあおらないように、損傷個所の数だけではなく、そのうち危険性の高いものがどれくらいあったのかといった説明も必要だったのではないかな。また、首都高の一部を地下化することについては、スペインのマドリードなど海外の先進事例も紹介するとよかったと思う。

- 6月2日(火)の「かがのとイブニング」を見た。ふるさと旬の味という料理コーナーで、加賀太きゅうりを取り上げていた。購入したことがなく、どう料理してよいのかも知らなかったのが、参考になった。9日(火)は、小松菜とアサリのパスタを紹介していて、出演者が自分で料理を作り、みずから食べて、コメントしていたことがおもしろかった。3日(水)は、「トップに聞く！新型コロナ危機」という企画で、和倉温泉にある旅館の社長にインタビューしていた。新型コロナウイルスの影響で温泉街が閑散としていたようなので、状況が気になっていた。新型コロナウイルスによる危機を乗り切るキーワードは正直と誠実と言っていたことに共感した。10日(水)に出演した地元企業の社長は「和」をキーワードとしており、今まで当たり前と思っていたことが、これからはすごく大切になるのではないかと感じられた。リモートで出演していた番組キャスターが、スタジオ中央の画面に大きく映し出されていた演出には違和感を持った。
- 6月5日(金)の金とく「アノコロTV 知らないとは言わせない！」(総合 後7:33～7:58 東海3県)は、とても“緩い”番組だったが楽しく見ることができた。タレントのきくち教児さんとシンガーソングライターのつボイノリオさんが出演したことに驚いた。きくちさんは民放のイメージが強く、つボイさんを紹介する際には「金太の大冒険」に触れていて、とても驚いた。さすがに歌は流さなかったが、BGMだけでも流してほしかった。ニュースを読む硬いイメージしかなかったNHKのアナウンサーの軟らかい顔も見られて楽しかった。1981年に名古屋オリンピックの招致が実現しなかったときの映像などは、たいへん懐かしく感じられた。NHKアーカイブスの資料映像を活用してこうしたクイズ番組を作ったとのことだが新型コロナウイルスが流行している時代ならではの番組だと思った。
- 6月7日(日)と14日(日)の「これでわかった！世界のいま」、13日(土)のNHKスペシャル「混迷のアメリカ～コロナ時代 世界で何が起きているのか～」を見た。アニメーションには、それほど違和感を持たなかった。海外では黒人が身近にいることは当たり前だが、日本ではあまり見かけることはなく、差別や人種の問題は遠くに感じていたが、これからは人種の問題だけでなく、ジェンダーの問題なども含めて、考えていかななくてはいけないと思った。
- 「これでわかった！世界のいま」は番組を見てはいないが、SNSで批判が広がっていることは知っていた。世界の情勢を分かりやすく伝えることと、複雑な問題を類型化してしまう危険とは表裏一体であり、その難しさを感じさせられた。なおNHKが謝罪した際に、「不快な思いをさせてしまった」と言っていたことに違和感を覚えた。これは人権問題であり、歴史的認識の問題なので、快、不快の問題としてしまうとポ

ピューリズムに陥ってしまう危険があると思う。

- 「これでわかった！世界のいま」で放送された動画を見たが、不適切だと感じた。削除したとのことだが、インターネットで公開してしまったものを完全に消すことはできない。拡散の可能性なども十分に認識したうえで、これまで以上に丁寧に情報を伝えていってほしい。
- 6月9日(金)のクローズアップ現代+「【苦境】女性の訴え収入減・また私たちがシャドーワークも」を見た。日本ではもともと男女間の経済格差が大きく、“コロナショック”で危機的な状況に陥っている女性が非常に多いことがよく伝わる番組だった。ただし、雇用調整助成金が何か月も入金されなく休業手当が払えないという会社の話があったが、申請から3週間で支給されたケースもあるので、助成金は常になかなか入金されないものであると勘違いさせてしまうような表現は良くないと思った。また、ともに在宅勤務をしている夫婦の取材をしていたが、男性は仕事だけをして、女性は子どもの世話をし食事も作り、自分の仕事に集中できるのは夜中になってからという状況が紹介されていて、非常にリアルだと思った。女性の置かれている状況は決して平等ではないということを改めて感じさせられた。コロナを機に、こういった課題がより明確になって、社会の変革につながるとよいと思う。
- 6月11日(金)のクローズアップ現代+「バッシングから再起“感染の現場”その後 訴え・葛藤と決意」を見た。新型コロナウイルスのクラスターが発生したライブハウスや介護施設でバッシングを受けた人たちが顔を出し、自分のことばで話をしていて、どのように再起したのかがうまくまとめられていた。シンプルに番組の目的が明示されていて、30分があつという間に感じられるすばらしい番組だった。「リスクを受け入れる寛容さを養うということ、できますかね」といった武田アナウンサーの問いかけに対し、東京大学の武藤香織教授が「やりましょう」とひと言で答えていたのが、視聴後の気持ちをすがるすがるしくさせてくれた。
- 6月12日(金)のナビゲーション「あなたの睡眠 大丈夫？～コロナから取り戻せ“睡眠リズム”～」を見た。新型コロナウイルスに関連する問題として睡眠の乱れを取り上げるようなタイトルだったが、実際の内容はゲームやSNS、スマホといった新型コロナウイルス流行による問題が起きる前からあった生活習慣が睡眠に与える影響が中心だったため、誤解を招くのではないかと思った。新型コロナウイルス特有の問題なのかどうかといった冷静な判断も必要だと思う。また、小学生の睡眠についてのアンケート結果を紹介していたが、全体の状況をつかむにはサンプル数が少ないように感じられた。データの扱い方をもう少し考えたほうがよかった。

- ナビゲーション「あなたの睡眠 大丈夫？」を見た。睡眠や覚醒のリズムが乱れるのは、新型コロナウイルスというよりも在宅時間が長くなったため、要するに生活習慣の乱れの話なのだろうと思った。夜中までスマホやゲームをしていれば、朝起きられないのは当然だと感じた。夕食の時間を遅くならないようにして子どもの生活リズムを整えるといった話は、大切なことだと思った。番組の最後にゲストが、子どもたちだけでなく大人が睡眠を大事にしていなと指摘していた。まさにそのとおりで、まず大人が睡眠をもっと大切にすべきだと、きちんと呼びかけていたのは良かった。

- ナビゲーション「あなたの睡眠 大丈夫？」を見た。睡眠リズムが狂うのはゲームをする子どもや学生に多いが、外出などの自粛の影響で大人も睡眠リズムが乱れているのではないかというのは、新型コロナウイルスに無理に結び付けていたようにも感じた。番組では、睡眠リズムを取り戻すためのアドバイスをしようとしていたが、子どもに関する話かと思って見ていたら、急に飲酒の話が入ってくるなど、子どもと大人、どちらの話をしているのかよく分からなくなる部分があった。ゲストの中山医師が、睡眠障害は健康を害するというのを医療者が十分に伝えていないと言いつつ、医療従事者にとっても睡眠が大切であることを指摘していたが、その話に絞って番組を作っても良いのではないかと思った。

- 6月13日(土)のNHKスペシャル「混迷のアメリカ～コロナ時代 世界で何が起きているのか～」を見た。冒頭で「これでわかった！世界のいま」の動画に対する謝罪もあり、内容も非常に丁寧に作られていて、とても勉強になった。抗議運動が黒人だけでなく白人の間も広がっていること、そして世界中に広がっていることがよく分かった。公民権法が施行されてから50年以上たっても黒人差別が解決されていない現実を目の当たりにした。経済学者・思想家のジャック・アタリ氏が「利他主義」について語っていたが、他者の幸せが自分の幸せになる、黒人の成功が白人の利益にもなる、そうして人々の連帯が世界に広がっていくという意見は、とても前向きな気持ちになれるもので、重要な視点だと思った。

- 6月16日(火)の病院ラジオ「依存症治療病院編」(総合 後 11:45～17日(水)前 0:25)を見た。アルコールやゲームの依存症を治療する病院に出張していた。患者一人一人が自分自身のお医者さんになるような、みずから治療に向き合う姿が見えて、とてもよい番組だった。また、病院が立地している海沿いの景色も、とてもすばらしかった。

- 6月7日(土)のこころの時代～宗教・人生～「緊急事態宣言の日々に」を見た。新型コロナウイルスによって世界が変貌していく様子を叙情的な映像で表現しながら、作家の辺見庸さんがその折々に感じたことを述べていた。「弱者のとう汰が専門家によって正当化される可能性がある」という哲学者ジジエク氏の言葉や、「生き延びるためにやむを得ないと言いながら人間の顔をした専門家が野蛮をやりかねない」という辺見さんの思いを伝えていた。医療現場ではやむを得ず命の選別が行われる場合があるが、新型コロナウイルスの場合、例えば大規模災害や臓器移植の場合とは違って、数時間から数日という、早すぎもせず遅すぎもしない時間の中でその判断が行われている。高齢者などの弱者が犠牲となってしまう過程を無視して、社会が進んでしまう危うさを抱えているように感じている。新型コロナウイルスが流行している社会の移ろいを作家の部屋から概観し、ふかんに展望していくという演出は新鮮であり、感銘を受ける番組だった。
- 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、美術館が休館、演劇や能、歌舞伎などの舞台芸術が公演中止に追い込まれる中、日曜美術館ではさまざまな作品を紹介していた。番組では、松林図屏風を年月がたてばたつほど成長していく名画であると紹介していたが、よい絵は多くの人たちがコメントすることでさらによくなっていく。美術館などに行って鑑賞することができない状況のなかで、多くの作品を番組で紹介してくれたのはよかった。
- 5月23日(土)のBS1スペシャル「コロナ新時代への提言～変容する人間・社会・倫理～」を見た。人類学者、歴史学者、哲学者それぞれのジャンルの識者の選択がとてもよかった。オンラインによるインタビューで構成されていたが、スタジオに集まって議論が繰り広げられていればさらによい内容になったのではないだろうか。さまざまな分野でデジタルトランスフォーメーションが進んでいるが、まだ「リアルのよさ」を超えられていない部分もあると感じた。そういう意味ではメディアコミュニケーションがどう変化していくべきなのかといったことが問われているようにも思う。いまの状況は情報過多になっているとも感じており、文字情報がたくさん出てくる番組などを見ていると、放送のリテラシーもこれまでとは違ったものになっていくのだろうと考えている。
- 6月15日(月)プレミアムシネマ「フリーソロ」を見た。アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞を受賞した非常に優れた映画で、放送されることがうれしかった。ドキュメンタリー系の映画は評価されても、多くの人目に触れる機会は少ない。このような優れた作品を放送することはNHKにしかできないことだと思うので、今後も期待したい。放送することをもっと告知してもよかったと思う。

- プロ野球などスポーツの試合や大会が始まり、やっと日常の一部が戻ってくるという期待感にあふれている。このところ「不要不急」という言葉がすっかり定着していて、「不要」と「不急」がひと括りにされて使われることが多いが、スポーツや文化・芸術にライブで触れることや、あるいは人と人とが直接かかわることのなかには、不急ではあるけれども不要ではないものもたくさんある。「不要不急」という言葉の使い方について、メディアが問題提起をしてほしい。

- 教育現場でもオンラインでの授業が広がっている。教員にとっては大変だが、学生からは、例えば入院していても授業が受けられるとか、オンデマンドで反復学習ができる、自分のペースで受講できるといった声が上がっている。学ぶということの本質を変えずに、教え方や学び方をどのように多様化していくのかが問われていると感じている。テレビも同様で、インターネットで見られるなど、視聴方法の多様性がNHKプラスで確保されていることは、よいことだと思う。ただ、パソコンで使用する際、検索をしても見たい番組が出てこないし、どこで何が見られるのか分からず非常に使いにくいと感じている。期待しているので、もっと内容や機能を充実させてほしい。

- 午前6時台の「おはよう日本」を見た。ソーシャルディスタンスの2メートルがどのくらいなのかをご当地のものを使って伝えており、愛知県は名古屋城の金のしゃちほこ1個分と言っていたが、どのくらいなのか全く分からなかった。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

2020年5月NHK中部地方放送番組審議会

5月のNHK中部地方放送番組審議会は、21日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「2020年度中部地方向け地域放送番組編集計画の変更点」について、片山編成部長から報告があった。

続いて、事前に視聴した、ナビゲーション「コロナショック～雇用をどう守るのか～」など、放送番組について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、「2019年度中部地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	稲村 修	(魚津水族館館長)
副委員長	松田 裕子	(三重大学副学長)
委員	井口 昭久	(愛知淑徳大学健康医療科学部教授)
	岡安 大助	(中日新聞社取締役)
	榊原 陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
	坂田 守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
	玉井 博祐	(能楽師／玉井屋本舗社長)
	都築 紀理	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	徳田八十吉	(徳田八十吉陶房代表)
	成島 洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	安井 香一	(東邦ガス(株)代表取締役会長)

(主な発言)

<視聴番組等について>

視聴番組：ナビゲーション「コロナショック～雇用をどう守るのか～」

(総合 5月15日(金)放送)

- 新型コロナウイルスの影響で仕事を失ったブラジル人家族の息子が言った「こんな弱いお父さんとお母さん見たことがない」ということばが印象的で、外国人労働者が置かれている実態に迫っていた。支援団体の活動も紹介されていたが、冗長に感じ、もう少し短くまとめたほうがよかったと思う。雇用調整助成金の申請手続きの煩雑さなどは、国民の関心事であり、もっと問題を追及してもよかったのではないか。ふだんは気に留めていなかった派遣会社や労働局の現状を明らかにしていたのは良かった。

新型コロナウイルスに関するNHKの報道は全体として高く評価しているが、この番組も、準備期間が短かったにも関わらず、十分に取材されており、優れた番組だった。

- 4月17日(金)と24日(金)の「ナビゲーション」も、この2か月で起こった医療の世界の劇的な変化を捉えた優れた番組だった。保健所の内実もよく伝えており、私たちにはまだ知らないことが多いのだと番組を見て実感した。新型コロナウイルス感染症の出現で、医者と患者の関係が大きく変わろうとしている。患者は医療機関に近寄らなくなった。医療から患者をこれほどまでに遠ざけてしまっている原因は、国の不作為にあるのではないかと思った。患者が病院へ自由に行けない状態も「医療崩壊」であり、それはすでに起きているといえる。仮に、次の感染の波とインフルエンザの流行が重なった場合、このままではパニックが起きかねないと思う。これまでNHKが果たしてきた役割は大きいと思うが、今後は、そうした事態に陥らないよう、備えを十分に整えることに重点を置いた報道をお願いしたい。
- 特に対面での取材が難しい中で、今回のような番組を制作したことに敬意を表する。外国人労働者の現状、派遣会社の大変な状況をしっかり報道していたが、コロナショックの中で雇用をどう守るかという問題に対し、外国人労働者の話だけにほぼ終始していた印象があり、違和感があった。この問題の一面しか捉えていない作りになっていたのでないか。派遣労働者や外国人労働者が雇用の調整弁になっていると表現していたが、それはこれまでもずっと言われてきたことであり、不景気になると日本人よりも先に外国人の雇用が失われることを指している。今は、日本人、外国人を問わず失業者が何百万人にも膨れ上がるような状況であり、調整弁という表現そのものが時代に合わなくなっているのではないだろうか。コロナショックの影響は、業種や業態によって千差万別に広がっている。戦後の日本が経験したことがないような事態に直面しているのだから、雇用の問題はさまざまな切り口で取り上げるようにしてほしい。
- 外国人労働者は非常に弱い立場にあり、特に製造業では最初に影響が現れるため、最も厳しいケースを取り上げたという意味ではよかったと思う。しかし、外国人労働者の仕事がなくなっている理由は派遣会社にあるのではなく、派遣先の会社が派遣会社との契約を切っているためであることを考えると、そこへの取材や言及がなかったことに違和感をもった。雇用調整助成金に関しては、申請しにくいことは確かだが、そのことばかりがクローズアップされてしまうと事業主が申請を諦めてしまう。簡素化が進んでいることなども伝えるべきではないか。番組では、失業手当についても触れていたが、もし事業主が安易にそうした方法を選択してしまうと、解雇が広がり大変なことになる。雇用調整助成金については、特に丁寧な説明、報道をしてほしい。多くの会社が助成金を必要としているが、会社の数だけでなく、そこで働く人のこと

を考えると、あらためて大事な問題だと感じる。

- 愛知県は外国人派遣労働者の数が全国でも非常に多いことから、外国人の取材を中心にしたのだろうと思った。労働組合や派遣会社、労働局などを幅広く取材しており、この問題の大きさ、幅広さを伝えていたことを評価したい。また、働く人を大切にする社会をこれから目指していかなければいけないという、ゲストのシンクタンクの山田久さんの未来を見据えたコメントも好印象だった。今回取り上げた課題が社会にどれほどのインパクトを与え、全体像がどうなっているのか、さらに、現状をどう捉え、この先をどう見据えていけばよいのかなど、示唆に富んだ番組だった。
- 非正規労働者とはいえ、7年間も働いている社員を電話だけで解雇するということは考えられない。仕事がないのに雇い続けることが難しいことは、外国人だけでなく日本人労働者も同じだと思う。あえて外国人労働者の問題として取り上げたのは、雇用の調整弁であることを言いたいがためなのではないか。外国人に特化した支援については、以前の「ナビゲーション」でも取り上げられていたが、生活弱者の何が問題なのかを突き詰めて考えてほしい。解説者が来年半ばまでに100万人の雇用喪失、来年末まで続けば200万人にもなると言っていたが、そうすると外国人であろうが、日本人であろうが大きな問題であり、足元の経済が総崩れになってしまう。元の状態に完全には戻れないと思うが、解説者の言うとおりに、働く人を大事にする社会であればと思った。
- タイトルに「雇用」とあるが、派遣社員や外国人のことばかりが取り上げられていた。正社員や学生アルバイトについても触れるのかと思って見ていたので、肩透かしに遭った気がした。働く人を大切にする社会が望ましいというまとめ方をするのであれば、もっと幅広く事例を紹介したほうがよかった。新型コロナウイルス関連の番組が多いので、タイトルから内容が判断できるように工夫してほしい。「雇用」ではあまりに漠然としすぎており、焦点が定まらなかった。豊橋市のブラジル人が仕事探しで70件ほど電話をしていた場面で、島根県の会社もだめだったと言っていた。その瞬間、これは深刻だと感じた。雇用調整助成金について、模型を使った解説は分かりやすかった。関連して失業手当の話が出たが、雇用を守るためには、それではだめなのだということをきちんと言わないと、「その手があったか」と思う人もいるかもしれない。もう少し丁寧に伝える必要があったのではないか。また、せっかくフリップボードを用意したのであれば、失業者の試算などは口頭だけではなく書いて説明するなど、もう一工夫あったら、さらにインパクトのあるよい番組になったと思う。
- ブラジル人女性が7年も務めていた会社に電話ひとつで解雇されたのは、ひどすぎ

る話で悲しいことだと思った。また、夫婦が共に仕事を失った話からも大変なことが起こっていることが伝わってきた。また食料品のような、生きていくうえで必ず必要なものとは違う芸術関係の仕事にとって、今は大変な時期だと感じている。東日本大震災などのときも厳しかったが、今回も未来を信じて頑張っしてほしいと思う。「コロナ後」ということばを聞いて、今までと違う時代が来る、あり方が大きく変わるという、むしろ明るいイメージを抱いた。働く人やその家族、それぞれの人生を大切に、前向きに考え直していく時ではないかと強く思った。

- 新型コロナウイルスは、健康だけでなく経済や精神的にも影響を及ぼすことが大きな特徴だと思う。この番組を見て一番強く感じたことは、弱者がより大きな被害を受けるのだということ、貧困がさらなる貧困を生み出し、格差や分断が大きくなっていくと思う。団地での生活支援では、掲示板に情報を出したり、ほかの地域のNPOとオンラインで情報交換をしたりする様子が紹介されていたが、情報は人々にとって必要最低限なインフラなのだと思う。外国人労働者がこういった番組を見ているのか、必要な情報を得られていないのではないかと感じたので、これからは、テレビ局が放送はもちろん、ネットを通じた非常時の情報発信や、多言語での情報発信を担うとともに、必要な人に必要な情報を届ける手段についても考えてほしい。
- コロナショックの中での取材と番組制作は本当に大変だったと思う。その点については敬意を表したい。ホームページの番組説明では「解決策を探る」と書かれていたため期待して見たが、入り口と出口が違っていただけに感じられ、一番伝えたいことは何だったのか、もやもやした感じが残った。外国人労働者、派遣労働者、雇用調整助成金の手続きの煩雑さなど、いろいろな問題が盛り込まれていたため、伝えたいストーリーの柱がぼやけていたように感じた。また、番組で紹介されていた団地やNPO法人は1月の視聴番組でも紹介されていたが、今回の番組で取り上げる必要があったのかどうか、制作者の都合で取材がしやすいところを選んだのではないかといぶかしんでしまった。外国人労働者特有の問題を扱っていると思っていたら、雇用全般に関わる数字が出てきたり、派遣会社の話になったりしたため、もう少し整理した方がよかった。新型コロナウイルスの問題と外国人労働者の問題は分けたほうが、分かりやすかったのではないかと。また、助成金の手続きの問題を取り上げるのであれば、その問題だけに焦点を当てたほうがよかったようにも感じた。解決策を探ることを期待しながら見ていたので、現場で働く人を大事にする社会が持続性の高い社会になっていくとか、労働者をどう守るのか日本社会の力が問われているといった“大きな話”で番組がまとめられていたのは残念だった。
- 新しい情報に接したという驚きはなかった。在宅率が非常に高くなり、また、新型

コロナウイルスは最大の関心事なので、すでに多くの情報が得られているからだと思う。未知なる新型コロナウイルスへの対応を、最初から完全で的確なものにすることは難しく、そもそもさまざまな状況で暮らしている人たちへ平等に救済を行き渡らせることは至難の業であり、どうしても取り残されたり窮地に陥ったりする人たちが出てきてしまう。そういう人たちにスポットを当て、細かな取材でフォローしていくのも、今のメディアの役割の一つだと思う。今回の番組は、多くの日本人が窮地にあるのだから、外国人がその延長線上にいることに対して驚きも少なかったのだと思う。1月の視聴番組では外国人労働者の高齢化をテーマに同じ団地を取り上げていたが、継続して取材し、いろいろな角度で取り上げることは意義のあることだと思う。正規や非正規、フリーランス、外国人といった今の労働構造のあり方が本当によいのかという問題が、新型コロナウイルスをきっかけに表に出てきたように感じる。世の中の仕組みを変えるには、世間での認識が高まり、問題として取り上げられて救いの手が届けられ、その後、課題として議論されて変わっていくといったサイクルに乗せる必要がある。番組では、解説者のことばを借りてそのことを指摘はしているが、インパクトが足りない印象を受けた。今後、外国人労働者にどんな分野で、どんなレベルの労働を提供してもらい、社会としてどう支援していくのか。「コロナ後」のその先を考える、もう一步踏み込んだ問題提起に期待したい。

- 派遣会社や派遣社員、外国人労働者の苦しい現状のほか、生活困難者に早急な対応が必要なことやボランティアの苦勞がよく分かる番組だった。新型コロナウイルスによって、より顕在化した外国人労働者の難局をクローズアップした点は評価できる。ただ、ほかにも多くの方が苦しんでいるのに、なぜ外国人労働者を特に取り上げたのかは疑問だった。また、「コロナ後」は“働く人を大事にする社会”に変わることを期待するといった話もあったが、具体性がまったく感じられなかった。問題の解決策を考えるならば、元請け会社や国、自治体に現状をどう考えているのかを取材するべきだと思う。番組のホームページには「労働者を守るには何が必要か？」とあったが、その問いには答えられていないと感じた。NHKの番組では、大事なことを専門家に語らせることが多いが、専門家の意見も様々であるという前提に立って、多様な考え方を伝えるようにしてほしい。

(NHK側)

幅広い事例を紹介するべきだ、派遣先の取材ができてないといった意見をいただいたが、語るべき要素を25分の番組で全うするのは、やはり難しいことだと改めて感じた。新年度に入ってから「ナビゲーション」では新型コロナウイルス関連について取り上げ続けており、4月は感染や医療崩壊を中心に、5月は外国人労働者を取り上げた。次回は中小企

業の経営者がどう乗り切ろうとしているのか、信用金庫等に取材して制作した番組を放送する予定にしている。また、学校再開や就職活動について取材を続けているが、医療や雇用だけではなく、さまざまところに広がっている新型コロナウイルスの影響も取材して、発信していきたいと考えている。ブラジル人家族の息子の「こんな弱いお父さんとお母さん見たことがない」ということばは、ぜひとも伝えなかった部分であり、とても勇気づけられる意見だったので、制作スタッフにぜひ伝えたいと思う。

- 5月9日(土)のNHKスペシャル「ふり向かずに 前へ 池江璃花子 19歳」(総合 後 7:30~8:30)を見た。東京オリンピックを象徴する選手になるとみんなが思っていたさなかに白血病で入院し、およそ400日ぶりにプールに戻ってきたときの喜びの様子などを伝えていた。取材を始めたころには、世の中がいまのような状況になることなど想像していなかったはずだが、池江さんといまの日本が置かれている状況とが重なって見えた。池江さんが「苦しいけれども明るい未来がある」というようなことを言っていたのが印象的で、よいタイミングでの放送だった。
- 5月18日(月)のハートネットTV「たけし、自立生活はじめました。～重い知的障害のある人の新しい暮らし～」を見た。障害者の自立生活を支えるシェアハウスの取り組みが紹介されており、重い知的障害のある人たちの様子が伝わってくる内容だった。
- 福井放送局では子どもたちと一緒に踊ったり、遊んだり、実験や工作をする「ニュースザウルスふくい」で取り上げた内容をホームページでも紹介している。放送で一度見ただけでは覚えることが難しい工作などの動画をインターネットでも配信することで、放送だけでは伝えきれないことを補完できていると思う。新型コロナウイルスの問題は、地域によって、必要な判断や置かれている状況がさまざまに異なる。そのとき地域の放送局が何を発信していくのか、放送だけでなくインターネットも使ってどういうコンテンツを考えていくのかということも問われているのではないか。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

4 月中部地方放送番組審議会休会のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、4月16日(木)に予定していた中部地方放送番組審議会は休会となりました。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局